大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

Kristevaの主体生成とアブジェクシオンの発生

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 暢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005297

Kristevaの主体生成とアブジェクシオンの発生

博士後期課程3年　石　田　暢　子

Ⅰ．はじめに

Kristevaは人の中に生じるおぞましい感情をアブジェクシオン（abjection）という言葉を用いて説明している。Kristevaは，主に強迫神経症や境界例の精神分析的アプローチの中から，臨床的に意味あるものとしてアブジェクシオンという概念を見出してきた。筆者は，Kristevaが彼女自身の臨床活動の中から見出してきた，このアブジェクシオンという概念は人の心を理解するのに非常に重要な概念なのではないかと考えている。しかし，日本にKristevaを紹介しているのは主に文学者や社会学者である。アブジェクシオンが臨床活動の中から生み出されてきた概念であるならば，本来は心理臨床家がKristevaの概念を日本に紹介し，日本での心理臨床に応用していかなければならないはずであるが，ほとんどなされていない。Kristevaの理論の特にアブジェクシオン論は，主体の生成や自我の誕生に深くかかわる概念であるために，主体や自我が大きなテーマとなっている今日の心の問題を考える上では非常に重要であり，かつ有用なのではないかと考えられる。

そこで本論文では，まず，今までほとんど心理臨床の世界で触れられることのなかったKristevaのアブジェクシオンという理論について筆者なりにまとめた形で論じたいと考えている。というのも，アブジェクシオンについてKristevaは『恐怖の権力』（1980）という著書の中で，アブジェクシオンがどういう性質のもので，どういったところで表れ，どういう影響力があるのかということについては詳細にまとめてはいるが，アブジェクシオンの生成過程については述べられていない。それらは，Kristevaがいくつかの論文を執筆していく中で，徐々に明らかにされていった。そのため本論文では，それらを筆者なりにまとめ，ひとつの流れとしてとらえてみたい。

Ⅱ．母子関係から生じる対象とアブジェクシオン

1．Kristevaの経歴

Julia,Kristevaは，1941年ブルガリアに生まれ，1966年にフランスへ移り住んだユダヤ人である。Kristevaは主にSaussurやLacanやFreudらの理論を中心に読み解き，それらを軸として記号論的・精神分析的研究に従事し，パリ第七大学にて，研究と教育に携わってきた。その一方で，彼女は研究から得られた精神分析的な視点から患者の治療にもあたっている。彼女は，それらの研究・臨床的活動の中から母性原理を中心に置いた彼女独自の理論を展開し，多くの著作を世に出している。彼女の思想は，精神分析のみならず，言語学や社会学，女性学などにも大きな影響を与え，ポスト構造主義の一翼を担うまでになっている。

2．アブジェクシオンの生成の土台

本論文では，Kristevaのアブジェクシオンの理論について筆者なりにまとめていきたいが，そのためには，まずKristevaがアブジェクシオンの理論を展開させるに至ったFreudやLacanの思想から述べていく必要がある。なぜならKristevaのアブジェクシオンの概念の根底には，FreudやLacanの思想が色濃く影響しているからである。KristevaはFreudやLacanの理論を深く理解する中で，Freudのエディプス構造やLacanの鏡像段階以前にこそ，主体生成の萌芽があり，そこにアブジェクシオンの起源があると考えたのである。そのため，FreudやLacanの論考も適宜織り交ぜながらKristevaのアブジェクシオンの理論について論じていきたい。

(1)　最初の分離のはじまり

Freud（1920／1970，p156）は「快感原則の彼岸」の中で，孫が糸巻をベッドの向こう側に投げて「オー」と言い，それをたぐり寄せて「ダー」と言うことを繰り返ししながら遊んでいるのを見て，「これは消滅と再現とを現す完全な遊戯だったわけである。……（中略）……つまり母親が立ち去るのを，さからわずにゆるすという衝動放棄（衝動満足にたいする断念）を子供が成しとげたことと関係があった。子供は自分の手にとどくもので，おなじ別れと再会を演出してみて，それでいわば衝動放棄をつぐなったのである。」と考えた。

この子どもの糸巻きの遊びについて，Lacanはさらなる考察を行った。新宮（1995）によれば，Lacanは，母の不在を寂しく思う子どもは，まだ主体的に欲望を分節化することはできないので，「僕は母を欲している」とは考えられないと考えた。糸巻きを持つ子ども

はまだ母と一体となっている状態であり，「ぼく」の目線で糸巻きを見ているのではなく，母の目線で糸巻きを見ているのである。そして子どもが糸巻きを投げる時，糸巻きを持つ自分は母と一体となっているのだから，投げ出されるのは糸巻きであり，かつ子どもである自分ということになる。母に放り出された自分と，糸巻きが重なる。つまり，子どもが投げ出す糸巻きに自分自身を見ているとすると，その瞬間当の子どもは自分自身を無化し，無きものにしているといえる。自分自身を無化する，そうすることによってはじめて，「オー」と「ダー」というシニフィアンの対が活動する事ができるようになるのである。

このことは自分自身を言語の二項対立的な活動，在と不在の活動に委ねることになる。Lacanはこのような自分自身の在と不在の運動中で，主体ということがはじめて意味を持つと考えた。Lacanが掴みとっていたものは,「在と不在という透明で形式的な動きによって進められる，自己の象徴化の過程」（新宮，1995, p190）である。ここでいう象徴とは，FreudやJung使われる何かを代理したり，普遍的無意識の何かを表現したりする内容のものではなく，シニフィアンと強く結び付いたものである。象徴はシニフィアンと無意識の関係を構成する基本的な要素であり，人間の精神活動において優位に立つもの，Freudの用語でいえば超自我にあたるようなものであり，エディプス構造をとることによって完成するものである。この意味での象徴は，人間の本質的な存在の欠如，つまり不在を受け入れることを余儀なくされるものである。

KristevaはこのLacanの示した象徴過程の中で生じた「不在」を，すべてのものの形成に先立つ「空虚」と捉え，この「空虚」に注目した。なぜなら，「象徴機能の糸口となるこの空虚は，まだ〈自我〉でないものとまだ対象でないものとの最初の分離」（Kristeva, 1982a, p158）として現れると考えたからである。KristevaはLacanの象徴過程によって生じる「不在」よりもっと前の，ナルシシズムが生じるその時に，それと同時に発生する「空虚」をとらえ，その「空虚」が〈自我〉と〈対象〉の分離に先立つ，まだ〈自我〉でないものとまだ〈対象〉でないものとの分離と考えたのである。しかし,心の中に突如として生じた「空虚」は心地よいものではなく，不満の源泉となるはずである。「空虚」が，母子二者一体の状態からの最初の分離として現れるとすると，この分離は保たれねばならない。それでは,なにがこの「空虚」を維持するのか。Kristevaは「空虚」を維持するものがナルシシズムであると述べる。

(2) 想像の父

Freud（1914/1969, p112）は，ナルシシズムを自体愛と対象愛の中間に存在する段階とし，「ナルシシズムを形成するためには，自体愛になにかほかのものが，つまり一つの新しい心的作用が付け加えられなければならない」と述べている。このことからKristeva（1982a, p156）は，「Freudはこの概念が〈新しい作用〉の産物であると，つまり母子二者一体の自体愛を補足する第三の審級の産物である」と考えていると指摘する。さらに，ナルシシズムは母子の二者以外の何か第三の心的作用が付け加えられるのであるが，この時期はまだエディプス構造の成立していない時期であるので，ナルシシズムはエディプス的〈自我〉の成立する以前に従属する，象徴界内の形成であるとKristevaは考える。そのため，母子二者一体の状態を補足する第三の審級にKristevaは，エディプス構造の父性機能以前の「父性機能の太古の様態」を考えるに至る。ここでいう父性機能とはLacanの言う象徴機能を成立するために欠かせない，意味作用が組織される，基本的な記号表現を可能とさせる機能のことである。そしてその父性機能の太古的様態とは，「〈名〉や〈象徴的なもの〉（筆者注：〈名〉，〈象徴的なもの〉とはそれぞれLacanの言う父の名，象徴的父のこと）よりも前の，さらには〈鏡〉より前の様態であり,この様態が〈鏡〉の論理的可能性を内包している」（Kristeva，1982a, p156）と考え，その様態をKristevaは「〈想像の父〉の様態」と名づける。

では，〈想像の父〉とは何なのであろうか。Kristevaの〈想像の父〉とは，Lacanの母の欲望する先に空無を見つけ，母の欠けたものを埋めてくれる存在として，その空無に父なるものを見るという考えを発展させたものでもあり，「〈母〉に欲望された〈男根〉」つまり「〈母〉が〈すべて〉ではなく母が欲している･･･ことのしるし」（Kristeva, 1982a, p164）だという。〈母〉は〈すべて〉を有した存在ではなく,欠如な部分を持っている,それが〈男根〉であり,そのため子どもは〈母〉の中の欠如な部分に〈想像の父〉をみるのである。つまり，まだ父と母が分離していない原初的な心の状態においては，子どもの心的世界には父という存在は成立していないが，子どもは次第に母の中に欠如を見出し，その欠如を通して母の中に想像としての父を見出すのである。それがKristevaのいう〈想像の父〉であり，“母”が欲動や情動や感情と結びつくのに対し，〈想像の父〉は，表象と結びつくものなのである。

Kristevaは，子どもが母の中にこの〈想像の父〉を見出すメカニズムを，いわゆる前エディプス期の母が

仲介するおかげで準備されるとしている。つまり,〈想像の父〉の成立は，前エディプス期の母の仲介なしでは，その準備すらもなされないのである。

では前エディプス期の母が仲介するおかげで〈想像の父〉の成立の準備がなされるとは，一体どういう事なのだろうか。Kristevaは，その説明としてFreudの第一次同一化primary identificationの概念を挙げる。Freudの用いる第一次同一化とは，自己愛状態にある中で生じる，個人において最も重要な同一化であり，「仲介なしの同一視で，どの対象備給よりも早期のものである」(Freud, 1923／1970, p278) と説明できるであろう。Kristeva（1982a, p160）は，Freudはこの第一次同一化が「〈自我理想〉に発展する〈個人の先史時代の父〉との同一化以外のなにものでもないことを示しています」と述べる。Freudの理論において，この〈個人の先史時代の父〉の様態は，まだ性的差異の認められない時期のものである。すなわちこの〈父〉は〈両親〉にひとしいものであり，Kristevaによると〈想像の父〉に等しいものであるという。そしてKristevaによるとこの第一次同一化,つまり〈想像の父〉との同一化は,「いわゆる〈父〉の〈男根〉にたいして母のもつ欲望がその仲介」(Kristeva, 1982a, p163) することによって成り立つものであり，その同一化の在り方は,《無媒介的》で《直接的》なものであるという。それは，子どもの側からすれば次のような体験になるだろう。

> *子どもは自分でその欲望を育む必要がなく，それを〈母〉という仲介から受け取り，模倣し，さらには耐え忍ぶということ,〈母〉が子どもにその欲望を準備し，それを差し出す（あるいは拒否する）ということです。あたかも，このFreudの〈父――母〉との同一化，あるいは私たちが〈男根〉への母の欲望と今呼んだものとの同一化は，子どもにとって，この同一化は天から降ってくるかのようです。それは当然でしょう。というのもこの心的様態では子どもと母はまだ〈ふたり〉になっていないからです。*
> (Kristeva，1982a，p163)

母と一体化している子どもは，母の欲望する〈父〉の〈男根〉を，母と一体であるがゆえに受け取り，それと同一化する。しかしそれは,「天から降ってくるかのよう」なものであり，子どもからすれば青天の霹靂とでもいえる体験であろう。それが，Freudが「仲介なしの同一化」といった所以である。それゆえ，ここでいう〈想像の父〉との同一化は，母が父の男根を欲望する者（つまり，自分の中の欠如を埋める対象を欲望する者）として存在していなければならず，母自身が子どもの要求に応じたいという欲望以外の欲望を持つ者として，自分を子どもにはっきりと伝えうる限りにおいてだという。

〈母〉の欲望する〈男根〉，つまり〈想像の父〉なるものの登場は,子どもにとっては〈母〉が〈すべて〉ではないことに気づかされる体験となる。これは子どもからすれば大事件である。なぜなら，今まで思っていた母は〈すべて〉ではなくなり，欠如を埋めようとする欲望に餓える母の姿が立ち現われるからである。そして，それによって全てが満たされていた母に，欠如が見出され，その欠如に〈想像の父〉を見出すのである。そのためFreudが述べた,「ナルシシズムを形成するためには，自体愛になにかほかのものが，つまり１つの新しい心的作用が付け加えられなければならない」というのは，この全くの母子一体の自体愛の状態から，第一次同一化によって,〈想像の父〉という「１つの新しい心的作用」が付け加えられたことによってナルシシズムとなることを示していると言い換えることができるのではないだろうか。Freud自身も一次的同一化をnarcissistic identification，自己愛的な同一化という表現を用いたりしている。

では，Kristevaのいうナルシシズムとは何なのであろうか。そして，それが「空虚」とどう関連しているのであろうか。それについて，次に説明する。

(3) Kristevaのナルシシズムの構造と「空虚」の誕生

Kristevaのナルシシズムの理論は，Freudをはじめとする他の研究者の論と大きく異なる点がある。それは先に述べたように，一般的にはナルシシズムは状態ととらえられているが，Kristeva（1982b）はナルシシズムを“構造”ととらえた点である。このKristevaのナルシシズムの考えは，彼女の主体生成とアブジェクシオン論を考えるのに欠かせないものであるので，ここでまとめておきたい。

図１は，Kristeva（1982b）がナルシシズムの成立を説明するために用いた図式である。この図の左側には,〈対象以前の母〉であるA（bjet）が存在している。原初期の子どもは，この母子一体状態の中に存在しており，左側の世界のみで生きていると考えてよいだろう。しかし子どもは，ある瞬間に母の中に欠如を見出し,そこに〈想像の父〉を見出す。先にも説明したが,〈想像の父〉とは，表象と結びつくものであり，欲動や情動や感情と結びつく“母”とは，正反対のものである。図1でいえば，右側のP（i）である。するとこの瞬間，子どもは,〈対象以前の母〉と〈想像の父〉との間の

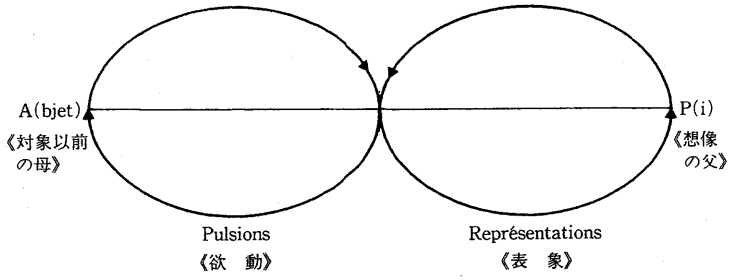

図1　『女の時間』より

大きなずれ，断絶に直面する事になる。別の言葉でいえば，欲動・情動・感情と表象との間の断絶に直面するのである。すると，この断絶面にA（bjet）とP（i）のどちらにも属さない“空”が生じてしまう。この“空”こそが，上述した「空虚」なのである。そして，この空虚こそが，主体生成の第一歩となるのである。そのため，この空虚は消滅させてはならず，しっかりと保たれねばならない。Kristeva（1982b，pp199-200）は，ナルシシズムは「欲動的なものから心的なものへの（欲動運動から表象への）移行だと私には思われるこの空虚を保護するために形成されたものではないでしょうか」と述べる。つまりナルシシズムは，この空虚を保護するベールとして機能するのである。

では，なぜ〈対象以前の母〉と〈想像の父〉との間に挟まれた空虚という構造が，ナルシシズムを生じさせるのであろうか。Kristevaは，Freud（1915/1970，p96）の「表象は充当――根本的には記憶の痕跡の――であるのに，一方情動と感情は放出の過程に相応するのであって，その末端のあらわれが感じとして知覚される」という論を基に，「ナルシシズムは，放出の過程（欲動，情動，感情）と備給（表象）との間の流通を保証します」（Kristeva，1982b，p199）と述べている。そして図1を見るとわかるように，まだそこではエディプスの三者構造が成立していないため（三項関係はあるが，エディプスの三者構造にはなっていない），リビドーの放出と備給が対象には向かわず，放出されたリビドーと備給されたリビドーが自己，つまり空虚の部分，将来主体が生まれる地点，へと向けられるため，その状態がナルシシズムだというのである。

(4)　主体形成の〈ゼロ度〉とKleinとの差異

Kristevaは，このようにナルシシズムに保護された空虚が象徴機能の糸口になるものだとし，また，先に述べたように〈自我〉でないものとまだ〈対象〉ではないものとの最初の分離として現れると考え，この構造を主体形成の最初のはじまりとして主体性の〈ゼロ度〉と定義した。つまり，母の中の欠如に気がついた時，子どもはそこに〈想像の父〉を見出し，さらに先に示したナルシシズムの構造が，〈想像の父〉との同一化を助ける存在となる。するとそこに，これまで一体となっていた母子との間に断絶が生じ，その断絶の地点から，母とは異なるものとしての主体の萌芽が生じるのである。そして，ここで生じた主体の萌芽こそが，アブジェクシオンという感情の生じる起源となるのである。その点については，次節に詳述する。

ちなみにKristevaは，ナルシシズムと主体生成のプロセスを，境界例の治療に生かしている。その事について簡潔に触れるならば，Kristeva（1982b，p210）は「境界例の患者たちの空虚で混沌とした言説を前にして，治療の最初の段階で，ばらばらになった彼らのことばの論理的脈略を回復させ，論理を通して傷ついたナルシシズムの輪郭をたどり直し，同様に情動を解放していくときがそうです」と述べている。つまり，欲動や感情に全面的に支配されている境界例の患者に対し，治療者が〈想像の父〉の役割を果たす解釈を投与する事で，表象次元での「欲動の満足の代理」，つまり論理を与えるのである。それによって，患者は欲動や感情（つまり〈対象以前の母〉）と論理（つまり〈想像の父〉）との間で断絶，空虚を体験し，その空虚をナルシシズムが保護する中で，患者の傷ついたナルシシズムは修正され，癒され，そして主体生成への第一歩を踏み出していくのである。（先取りして述べるならば，境界例の患者の治療において，治療者への攻撃が増す時期は，この主体生成の第一歩を踏み出した時点だと考えられる。なぜなら，その時期はそれまで一体となっていた治療者と患者との間（母と子の間）にずれが生じるからであり，そこにアブジェクシオンが生じる時期だからである）。

いずれにせよ，以上の事から，Kristevaの主体形成

の理論は，母子二者一体の状態から，母の欲望する男根によって始まるとすると，母の男根という母の中の欠如の存在としての〈想像の父〉を加えた三項関係から主体の生成を考えてはいるが，その根源はやはり母を源泉とする，まさに「母」との関係における主体形成のメカニズムであるといえる。このように，母子二者一体の状態から分離していく過程において，母と子以外の第三のものに〈想像の父〉を加え，三項関係から説明するのがKristevaの大きな特徴である。

ところで，Kleinも母子二者一体の状態から，母と子が分離し，エディプス早期へ参入していく様子を説明しているが，それはあくまでも二項関係からなるものであった。ここで，Kristevaの主体生成のメカニズムと比較するために，Kleinの早期母子関係の中で，エディプス構造が成立するまでを簡単にまとめておきたい。

新宮（1995）によれば，Kleinにとって，象徴形成の基盤は，母親の乳房を別のもので置き換えていく過程にある。Kleinは，置き換えが子どもの内に生じる理由は，子どもは無限の愛情を与えてくれる母の乳房を自分のものにしたいという欲求が生まれることから生じるという。しかし，それは手に入れることができないもののため，子どもは，手に入れられないのなら，破壊しなければならないという衝動にかられる。そして，幻想の中で子どもは乳房へ侵入しその内側から破壊してしまうが，子どもの生きる糧はその乳房から出る乳である。自分の破壊した乳房から乳を飲むことで子どもは自分の中から脅かされていると感じるようになる。子どもは自分の空腹すらもそのような脅威によるものだと感じるようになり，内面に抱え込んだこの脅威は，子どもの中で恐ろしい対象となる。子どもはこの恐ろしい対象，つまり悪い対象を自分の内側から追い出そうと外界の母親に投影し，苦しんでいるのは自分ではなく母親であると思うことで安心を得ようとする（妄想－分裂態勢の段階）。しかし，本当に悪い対象によって苦しんでいたのが母親なのか，自分なのかわからなくなり，母親と自分の区分はわからなくなってしまうのである（投影同一視）。このように，自分と母親との間を悪い対象が行き来する中で，子どもは自分の欲していた対象が，結局は所有することのできないものなのだということを自覚するようになる。そしてこの自覚は，欲しいと心から欲求していたものであるがゆえに，破壊してしまったことに対する罪の意識を芽生えさせ，その罪の意識から，子どもは失われてしまった対象に対して愛情を注ごうとする。しかし対象はすでに破壊されているため，子どもが手に入れるものは，常に何か別のものでしかない。欲望によって我々が手に入れるものは，常にその乳房の代わりのもので置き換えられたものであり，言い換えれば乳房の象徴なのである（抑うつ態勢の段階）。

以上，Kleinのエディプス早期に至る理論について簡潔にまとめてみたが，それに対しKristevaはKleinの妄想－分裂態勢の段階から，抑うつ態勢の段階に移行するには，次のように〈第三者〉の場所が必要であると述べる。「メラニー・クラインの〈投射による同一化〉と比べて，私の主張する命題にはエディプスの三角形になる前から，特有の様態の中で，〈第三者〉の場所を指摘できるという利点があります。この場所がなければ，メラニー・クラインの言う〈妄想－分裂性〉段階は〈抑うつ性〉段階になれず，したがって〈象徴等価物〉を言語〈記号〉に変化させることはできないでしょう」（Kristeva，1982a，pp165-166）。このように，Kristevaの主体形成理論は，象徴機能を成立させる上で欠かせない父性機能の太古の様態を含めたものである。

3．アブジェクシオン

(1) 主体形成とともに生じるアブジェクト

このように，母子融合状態であった子どもは，母が仲介となり〈想像の父〉と同一化することによって，ナルシシズムへ参入し，主体形成への一歩を踏み出す。そしてそのことは，今まで生きてきた母子一体の混沌状態を，おぞましいもの，アブジェクトとして感じ始める契機となる。「〈想像の父〉への無媒介な転移は，〈想像の父〉が天からあなたのところへ降ってくると，つまりあなたのところへ転移するのは〈想像の父〉の方だとの印象をもってしまうほどなのですが，こうした転移は，カオスでありえたものにたいする，そして……アブジェクト（おぞましいもの）になりはじめるものにたいする拒絶の過程を支えています。母の場は，このようなものとしてしか，つまりアブジェクトとしてしか現れ出ず，あとになってようやく〈自我〉の欲望にかかわる対象になっていくのです」（Kristeva，1982a，p165）。つまり，〈想像の父〉との同一化によって，それまで融合状態にあった母との間に空虚が生じ，母子分離の萌芽的動きが起こり，子どもの中にまだ〈自我〉になりきれていないが，〈自我〉になろうとするものが表れ始ることになる。カオスである母子融合状態の中から「まだ〈自我〉でないもの」が生じはじめた状態にある子どもにとって，それまでいた母の場は，混沌としたアブジェクトな場，すなわちおぞましい融合の場へと変貌していくのである。

ここにきて初めて子どものこころの中にアブジェクシオンが生成されるのである。つまり，子どものこころの中にアブジェクシオンが生成される過程は，これまで見てきたように，空虚の成立とそれと同時に起こるナルシシズムの発生が重要な契機となり，母が仲介となり〈想像の父〉と同一化することによって初めてアブジェクシオンが生じる。以上がKristevaのアブジェクシオンの生成に至る理論である。

(2) アブジェクトとは

では，Kristevaの述べるアブジェクトとアブジェクシオンとは，一体何なのであろうか。ここではまず，アブジェクトについて説明したい。

アブジェクトとは，母子融合状態から，「まだ〈自我〉でないもの」と「まだ〈対象〉でないもの」との最初の分離によって生まれるのであり，「まだ〈自我〉でないもの」が，「まだ〈対象〉でないもの」をアブジェクトとして感じるのである。つまり，Kristevaのいうアブジェクトとは，〈対象〉とならない未分化なものだといえるだろう。Kristevaはアブジェクトについて次のように述べている。

> アブジェクト［abjet ab（分離すべく）＋jet（投げ出されたもの）］は私と向きあった一つの対象，私が名付ける，あるいは想像する対象［ob-jet ob（前に）＋jet（投げ出されたもの）］なのではない。…（中略）…アブジェクトは対象から一つの性質――私（je）に対立する性質しか受けつがない。しかし，対象が対立を通して，意味に対する欲望の壊れやすい枠組みのなかで，私を安定させ，そして事実，そのために私は限りなく意味の中で身を休らうとすれば，逆に，対象からずりおちたアブジェクトは徹底的に排除されたものであり，意味が崩壊する場所へ私を引き寄せる。自分の主人である超自我と融合したある種の≪自我≫がアブジェクトを断固一掃したのである。アブジェクトは外部にある。自分がどうやら承認していないゲームのルールをもった集合全体の外にあるのだ。だが，この追放の地からアブジェクトは自分の主人に挑みかかるのを止めはしない。…（中略）…私がその苦痛に耐えるのは，他者の欲望がかかるものであると私が想像するためである。異様なものがどっと，だしぬけに出現する。それは，暗い，忘却の淵に沈んだ生活の中では私にとって身近なものであったかもしれないが，完全に私から切り離され，忌まわしいものとなった今は，私を攻め苛む。それは…（中略）…事物として私が認めない〈何かあるもの〉だ。（Kristeva，1980，pp3-4）

私たちは，名づけることで対象とし，象徴的に理解しながら生きている。しかし，その象徴体系に組み込まれないもの，名づけようとしてもどうしてもそこからずり落ちてしまうものがアブジェクトなのである。事物を対象としながら理解し，さまざまな事柄や感情をコントロールしている人間にとって，対象とならないものは理解しえないものとなる。しかも，アブジェクトは私が「承認していないゲームのルールを持った」ものであり，それらは「自分の主人に挑みかかるのを止めはしない」のであるとすると，今まで私たちが作りあげてきた象徴体系をも崩しかけない危険なものとなる。つまりアブジェクトは「意味が崩壊する場所へと私をひきよせる」ような，自分自身を自分自身とさせてくれているあらゆるものを崩壊させる危険のあるものとなるのである。さらにKristevaは次のように述べる。

> おぞましきもの（アブジェクト）。それは棄却されたものだが，ある事物に対してそうであるように，人はそれから自分を切り離せないし，身を守ることもおぼつかない。想像上の異様さ，かつまた現実の脅威。（Kristeva，1980，p7）

アブジェクトは自分自身を崩壊させてしまうような危険を持つものであるにもかかわらず，人はそれから自分自身を切り離せない。人はアブジェクトからけっして逃れることはできないのである。

そのように，我々の作り上げてきた体系を根底から覆してしまうようなアブジェクトになるものとして，Kristeva（1980, p7）は「おぞましきもの（アブジェクト）に化するのは，清潔とか健康とかの恐怖ではない。同一性，体系，秩序を攪乱し，境界や場所や規範を尊重しないもの，つまり，どっちつかず，両義的なもの，混ぜ合わせである。」と述べている。

(3) アブジェクシオンとは

上述してきたアブジェクトは名付けえぬものであり，対象とできないものである。では，それらを捉えるとすると，どうすればよいのか。Kristevaは「おぞましさ（アブジェクシオン）の極みとなる」ようなアブジェクトとして死体を挙げ，次のように述べる。

> 死体の分泌物，汚穢，糞便，これらは死のうちで生がほとんど耐えられないか，かろうじて耐え

うるものである。そこでは私は生者としての私の条件の限界にある。生き物としての私の身体はこの限界から発する。これらの屑は，喪失に次ぐ喪失を重ねて何も私に残らなくなるまで，私の全身が境界を越えて堕ちてゆく（cadere），つまり死体となるまで，私が生きるために落下してゆく。汚物が，私の存在しない，かつまた私の存在を許容しものする，境界を超えた側のことならば，屑のなかでも吐き気を催させることが最も甚だしい死体は，およそありとあらゆるものに進入した一つの境界である。もはや私が追放するのではなくて，〈私〉が追放されるのだ。境界が一つの物体と化したのである。境界がなければ，どのようにして私は生存し得るのか。（Kristeva，1980，p6）

生者である私たちが絶えず生きるために自分から切り離しているもの，それらによって，私が私としての境界を作っているとすると，死体と直面したときに，その境界を超えた先のものが私の世界に投げ出される。境界を飛び越え侵入してきたそれらは，境界をなくし，私を私として保っていたものを崩壊する。アブジェクトとは，〈対象〉とならないものである。死体と直面したとき，私が私である確かさを揺るがし崩壊させ，混沌の状態へと引き戻す，まさに〈対象〉の存在しない世界へと引き戻す力が死体には存在する。それゆえ死体はアブジェクトなのである。「死体」が「死を意味する」からアブジェクトなのではない。〈私〉の世界を揺るがし崩壊させるものであるからアブジェクトなのである。つまり，対象とすることができないアブジェクトを考える手がかりとなるのは，まさしくこの〈私〉の世界が崩壊しようとするときに，自分の中に湧き起こる〈おぞましさ〉という感覚なのであろう。その感覚がKristevaのいうアブジェクシオンなのである。そして，そのアブジェクシオン〈おぞましさ〉を理解するのに最も重要なのは，それが外からやってくるものでありながら，同時に内からもやってくるものであるところであろう。死体を例にとりながら，Kristevaが示したのは，それが自分とは決して無関係な存在でないことである。「生者として私の条件の限界にある」，「私の全身が境界を越えて堕ちてゆく（cadere），つまり死体となるまで，私が生きるために落下してゆく」ものは，落下するまでは生者の私の中にあるものである。死体を前にしたとき，私が瓦解すると感じさせるものは，外からやってくると同時に，それは内からも破壊の力を発揮するのである。Kristevaはセリーヌの文学に表れるアブジェクシオンを説明する際に次のように説明する。

セリーヌを読むことによって，われわれはおのが主体の脆く崩壊しやすい地点でつかみ取られる。われわれの防御が崩れ去ったこの場所で，城塞の外見の下から皮膚を剝がされた肌が露わになる。内部も外部もなく，傷つけようとする外部は，忌まわしい内部に反転し，戦いが腐敗と並行する。（Kristeva，1980，pp189-190）

攻撃するものが自分自身の内にあるものであるという，避けようにも避けられない，切ろうにも切れない，距離を取ろうにもとることもかなわない恐ろしさ。それが自分自身を〈自〉も〈他〉もない混沌へと引き戻そうとする〈おぞましさ〉なのであろう。この，単に外から〈私〉を破壊しようとする脅威ではなく，外からと同時に自分を自分自身と成立させていた自分の内にあるものからも，自分が壊されるような恐ろしさが，〈アブジェクシオン〉の本質なのではないだろうか。

Ⅲ．まとめ

本論文は，Kristevaのアブジェクシオン論と，そこに潜む主体生成のメカニズムを，心理臨床的な視点から捉えなおすことを目的とした。

子どもは，母子が融合した一体の状態から，母の中に欠如を見出し，その母の中の欠如を埋めるようにして，子どもはその部分に想像の父を見出す。すると，母の中に（母と子どもは融合している存在であるため，母の中は子どもの心の中でもある），母の部分と想像の父の部分が生じることになる。その想像の父は母と混じり合うことなく別の性質をもったものとしてズレ（＝ねじれ）ているものであり，その二つの世界の間には隙間が，つまり「空虚」が生じる。そして，この「空虚」はナルシシズムの構造によって，ベールのように包まれ，母子融合の状態からの最初の分離を保障するものとなる。子どもは，この二つの世界の中心の「空虚」の部分で，母の世界と想像の父の世界の同一化を交互に経験しながら，次第に想像の父との同一化を深めていき，それと同時に母の場はアブジェクシオンと感じるようになる。そして，想像の父と完全に同一化をした時に，もと居た母の場をアブジェクトとして棄却するのである。

このように，Kristevaは母子融合状態から，どのようにしてエディプス構造となっていくために必要な第三のもの，つまり父性機能がどのように生じてく

るか，その最初の地点を示したのである。Freudは自体愛の状態からナルシシズムへと移行するには，「一つの新しい心的作用が付け加えられなければならない」と述べたが，どのようにそれが心の中に生じてくるかまでは述べなかった。Kleinも象徴が成立するまでの過程について述べながら，その要となる母子一体の子どもの心の中に，象徴を扱うための原始の父性機能ともいえるものがどのように生じてくるかまでは述べていない。その点を埋めるのが，本論文でまとめたKristevaの主体生成のメカニズムである。そして，その主体生成の場所にアブジェクトは生じる。アブジェクトは主体が棄却したものでるがゆえに，主体が「承認しないルール」を持っているのだ。そのため，アブジェクトを認識する手がかりとなるのは，自分の中に生じる〈おぞましい〉という感覚つまり，アブジェクシオンなのである。

本論文において，以上のようにKristevaのアブジェクシオン論と主体生成のメカニズムに焦点をあてて論じた。しかし西洋で生まれたKristevaの理論がどの程度日本人のこころの問題に適用できるかについては紙面の都合上，本稿においては言及できなかった。そのため日本人のこころを考える上でどのように活かすことができるのかについては，今後の課題としたい。また，このアブジェクシオンが実際の心理臨床の場面で，どのように立ち現われてくるかについても考る必要がある。それに関しても今後の課題としたい。

〈引用・参考文献〉

枝川昌雄（1987）：現代思想文庫　クリステヴァ――テクスト理論と精神分析――洋泉社

Freud.S.（1914）：Zur Einführung des Narzißmus　懸田克躬（訳）（1969）：ナルシシズム入門　フロイト著作集5　性欲論　症例研究　人文書院

Freud.S.（1915）：Das UnbewuBte 井村恒郎（訳）（1970）：無意識について　フロイト著作集6　自我論・不安本能論

Freud.S.（1920）：Jenseits der Lustprinzips 小此木啓吾（訳）（1970）：快感原則の彼岸　フロイト著作集6　自我論・不安本能論

Freud.S.（1923）：Das lch und das Es 小此木啓吾（訳）（1970）：自我とエス　フロイト著作集6　自我論・不安本能論

福原泰平（1998）：ラカン――鏡像段階　現代思想の冒険者たち第13巻　講談社

Klein.M.（1932）：The psycho-analysis of children　小此木啓吾・岩崎徹（編訳）（1997）：メラニークライン著作集2　児童の精神分析　誠信書房

Kristeva. J.（1980）:Pouvorirs de L'horreur. 枝川昌雄（訳）（1984）恐怖の権力　法政大学出版局

Kristeva. J.（1982a）：L'abjet d'amour, *Tel Quel*, 91　棚沢直子・天野千穂子（編訳）（1991）：愛のアブジェ女の時間　勁草書房

Kristeva. J.（1982b）：≪Ne dis rien≫. A propos de ≪l' interdit de la representation≫, *Tel Quel*, 91　棚沢直子・天野千穂子編訳（1991）：「何も言わないで」――〈表象の禁止〉について――女の時間　勁草書房

Lacan. J.（1949）：Ecrits　宮本忠雄・竹内迪也・高橋徹・佐々木孝次（訳）（1972）：エクリⅠ　弘文堂

Lacan. J.（1964）：Le Seminaire, Livre Ⅺ, Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse, Texte etabli par Jacques-Alain Miler, Seuil（1973）小出浩之・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭（訳）（2000）：ジャック ラカン　精神分析の四基礎概念　岩波書店

西川直子（1999）：クリステヴァ――ポリロゴス　現代思想の冒険者たち第30巻　講談社

新宮一成（1995）：ラカンの精神分析　講談社